

---

# ふたりはプリキュアCross Stars

リーフェ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふたりはプリキュア Cross Stars

### 【NZコード】

N4496F

### 【作者名】

リーフH

### 【あらすじ】

今、地球は原因不明の海の減少、それによる異常気象によつて苦しめられていた。そんな時、6人の少年少女と1人の女性は不思議な夢を見る。その夢から、地球を救うための戦いがはじまつた！

## 第0話・プロローグ

「すいません雪城さん、こんな時にわざわざ……」

「いいえ。それにね、こんな時だからこそ会いたかったのよ」  
198X年、地球は異常事態に見舞われていた。それは海が無くな  
るという現象だ。

最初は北極海、次に南極海、南大西洋、と続き、今では南太平洋し  
かのこつていな。

海が無くなつていく中で異常気象が起こり、南太平洋が無くなれば  
人類滅亡は避けられないだろうと言われている。

「ともかく、今日は泊まつていつて下さい。もつ会えないかもしれ  
ないし……」

「あら、分かりませんよ。もしかしたら明日、何かが起こるかもし  
れません。希望をなくしてはいけませんよ」  
そう言って、雪城とよばれた腰まで届く黒髪と強い意思がうかがえ  
る黒い瞳の女性は、橢円形のコンパクトのよつた物を握った。

一方その頃

「もう、どうしようもないのですね  
と悲しそうな少女の声がした。

その声を出したのは、桃色の髪を後ろで団子のようにまとめ、薔薇  
の花と葉で胸元を隠し、緑色の長いスカートをまとい、頭の上に立  
ちハート型の飾りを背中に付けた、神秘的な雰囲気の少女である。  
普段から田を閉じてしているため表情が分かりにくいが、この時ばかり  
は誰の目にも少女が悲しんでいるのが分かった。

「ええ。時期に『太陽の泉』は消滅するわ。そうなつたら残り六つ

の泉も時間の問題ね

そう答えたのは、茶色の髪をブルシャンブルーの長い布をリボン変わりにしてポニー・テールにし、ミッドナイトブルーの瞳を持つ女性である。

「こうなつたら、新たな伝説の戦士を探さなければなりませんね」「けれどもどうするの?精霊と、あの子たちと相性のいい子たちを見つける時間なんて無いわよ」

「ええ。ですから今回は呼び掛けようと思うのです。幸いにも候補者はいますから」

「わかったわ。じゃあよろしくね、フィーリア」

「はい」

『聞こえますか?私の声が聞こえますか?聞こえたら、どうか力を貸して下さい。この世界を、あなたの方の望む明日を守るために。お願いします、力を……』

## 第一話・ありえない！いきなり世界の終わり？

翌朝

『あの夢は、一体……？』

かなり不思議な夢だつた。見たことの無い場所に立つ見たことの無い少女が自分に呼び掛けている。そして最後に見えたのは、「トネリコの森」と呼ばれる山の頂上にある「大空の樹」。

「どんな意味か分かりませんが、行ってみたら何か分かるかもしれませんね」

そう呟き、女性 雪城さん は出掛ける準備を始めた。

準備を終え、玄関に向かうと、

「……さんえさん？」

と、小学生くらいの少年が声をかけた。

彼の名は三島みしま宙明ひろあき、この家の主・三島信夫しのぶの第一子である。

「宙明君、どうかしたの？」

「……夢を、見たんです。僕より年上の、女の子が呼び掛ける夢。その後で

「大空の樹」と、女の子がいた場所にいる人たち。六人は知らない人だったけど、その中に、僕とさんえさん、夢の女の子がいたんですね

ゆつくりと夢の内容を思い出しながら話してゆく。

「大空の樹」までは同じ夢だが、それ以降は違う夢のようだ。

しかし、宙明は以前から未来の事を夢で見ていた。恐らく、途中からはその夢だつたのだろう。

「どうやら、私たちは同じ夢を見たようですね。これから「大空の樹」に向かおうと思うのですが、どうします?」

「……行く!」

二人が

「大空の樹」に近づくと、そこにはすでに五人の中学生くらいの少年と少女がいた。

「…………あ」と、ポツリと宙明が呟いた。どうやら彼らも夢の中にいたメンバーらしい。

更に近づくと、向こうも此方に気付いたらしく頭を向けてきた。

「…………あの、いきなり失礼ですが、あなたたちもあの夢を?」「ええ。それを聞くと言つことは、あなたたちも見たのね?」

「「「「「はい」」」」

更に詳しく話をしようとした瞬間、突如怪しい暗雲が立ち込め、

『ここで最後ですね』

という、禍々しい声が響いた。

「セシまでよーーー！」

その鋭い声は、今まで誰もいなかつた

「大空の樹」の側から発せられた。

そちらを振り向くと、そこには膝裏まである長い茶色の髪をブルシヤンブルーの長布でポーテールにした、ミッドナイトブルーの瞳の女性がいた。

さらに彼女たちの目を引いたのは、女性の纏つ服である。

朱色の丈の短い着物を洋服のようく改造し、足には朱色のミュール。袖は肘から手首までを覆い、振り袖を連想させる長さである。

そして指部分が露出したグローブ。

まるで

「不思議な力で変身し、悪と戦つヒロイン」を連想させる。

『最後の足掻きですか、キュアフェニックス！』

「ええ。これ以上好きにはさせないわー！」

『戯言を。力をほとんど奪われたあなたに何ができる……』

「それはどうかしら？！」

その瞬間、キュアフェニックスと呼ばれた女性が手を海の方へと向けた。その瞬間、海とキュアフェニックスが輝き、光が収まるとキュアフェニックスは普通の服装へ あえて違いを述べるなら、ポニーテールにしていた髪は長布を使い猫の尻尾の用にまとめられ、頭には狐の面をしていることだろう、海は小さな七つの宝石へ変わっていた。

「力がなくたって、これくらいはできるのよー。」

その叫びに呼応するかのように、宝石はさなえと宙明、五人の中学生の手に収まった。

「フイーリア！」

キュアフェニックスが叫ぶと、待っていたかのように、

「大空の樹」が金色に輝いた。

光が収まると、そこには誰もいなかつた。

『……しぐじりましたねえ。しかし緑の郷の世界樹の在処ありかはわかりました。後は泉の郷へどう行くかを考えましょつ』

誰もいなくなつた場所で、「青」を失つた景色を「大空の樹」だけが眺めていた……。

## 第一話・伝説の戦士！？異世界での説明

辺り一面緑に覆われた中にそびえる巨木。その根本にいた二人の少女が目を覚ました。

「…………いたた」

「…………は、一体…………」

「ああ、全員起きたみたいね」

その言葉に辺りを見回すと、先程現れた女性と、夢に出てきた少女、そして

「大空の樹」に集まっていたメンバーがいた。

「あ、あの……」

「『『』』は『』』とか『『』』とか聞きたいことはあるでしょうけど、その前に自己紹介しましょ。説明はその後」と、女性は微笑んで言った。

「まず私から。キュアフェニックスこと燎流かがるよ」

「世界樹の精霊、フイーリアです」

「雪城 さなえといいます」

「三島 宙明です。よろしく」「日向 大介です」

「雷河 沙織です」

「美翔 弘一郎です」

「雪月 可南子です」

「星野 光太です」

「そう。まずは单刀直入に言わせてもらつわ。沙織と可南子に、プリキュアになつて、七つの泉の一つ、『太陽の泉』つまり海をを取り戻すために戦つてほしいの」

当たり前だが皆それに対し混乱した。一体何を言い出すのだろうか。

「あの、説明の方はいいのでしょうか？」

「これからするのよ。最初に言い渡せば多少は受け入れやすいかと思つてね」

「そ、そういうのですか？」

「ま、いきなり説明されても意味が分からぬだろうからね。…落ち着いたみたいだし、説明するわよ」

「まずここはあなた達が住んでいた世界ではない、異世界の一つ『精霊の郷』。複数ある世界はバランスをとつて成り立つてゐるわ。ここまでいい？」

その言葉に7人は頷いた。

「バランスは滅多なことでは崩れないわ。そのバランスが崩れそうになるという事は、何者かの介入があるという事。そういう時に、それぞれの世界に伝わる伝説の戦士プリキュアに、人間界 あなた達の世界の、十代の少女が変身するの」

「…あ、あの」

「はい、弘一郎くん」

何だか学校のノリである。さなえはこいつして勉強していた時の事を思い出した。

「どうして人、それも十代の少女なんですか?」「心の持ち方一つで出せる力は違うし、仲間がいれば何十倍にもなる。それが謙虚なのが人だからよ。で、十代は思春期でしょ。それは一番多感な時期で、異なる力を受け入れやすいの。おまけに女は受け入れる側だから」

その言葉に、フィーリアと苗明以外顔を赤らめた。まさかそういう理由だとは。

「とは言えど、スウェーツ王国のプリキュアのように、年齢や性別関係なくプリキュアにふさわしい心の持ち主であれば変身できるのだけど。まあわざと言つたのは、最もふさわしい条件なの」以外と臨機応変に対応しているようだ。

「…本当なら、私もプリキュアだから何とかしたいけど、キュアフレンチの力の根元は『太陽の泉』、つまり海だから力は使えないのよ」

「だ、だからあたし達がプリキュアに?」

「ええ。さつき言った条件に当てはまるのはあなたたちだけだもの（さなえからも不思議な力…多分光の園のものを感じるけど、そちらはおいおい…かな）

説明が終わった、と感じたフィーリアは振り返ると  
「もう隠れなくともいいですよ」

と言った。すると一匹の不思議な生き物が現れた。  
「こきなりこの子たちに会うとパニックになり説明どころではない、  
と燎流さんが仰るので隠れていってもらいました。さあ、自己紹介し  
て」

「雷の精、ライシールだライ」  
「雪の精、スノーシェルでスノ」 「名字に『雷』『雪』って入ってる  
し、ある意味運命的ね。あ、言い忘れたけど私は長年戦ってきたか  
ら、変身しなくともそこそこ戦えるの。だからあなたたちのサポー  
ト及びトレーニングをさせてもらひつわ」

と雪の精の言葉で説明は終了した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4496f/>

---

ふたりはプリキュアCross Stars

2010年10月17日03時03分発行